数学部会

研究主題　「生徒による授業評価を生かした授業改善」
－　個に応じる指導を中心にして　－

研究の概要

本研究では、一斉授業における個に応じる指導を改善する手だてを中心に考察した。そして、その改善点を探るために生徒による授業評価を実施した。

生徒による授業評価の項目は、数学の授業に特化したものを中心に整理した。また、生徒の意見をより細かくくみ取ることができるよう適宜文章で答えられる項目も設けた。

生徒による授業評価を実施し、それを基に、授業改善の具体的な手だてについて考察した。委員による研究協議（校内研修に相当）を通して、検証授業実施校における生徒による授業評価結果を分析・考察し、授業の改善を図るため、個に応じる指導のための手だてを考察した。その結果、継続・強化する手だてと工夫・改善する手だてがあること、及びそれらは指導する教員と学習する生徒とのかかわりによって異なることを改めて確認した。

その後、授業評価に基づいた手だてを盛り込んだ学習指導案を作成し、検証授業を実施した。検証授業後の授業評価項目については、１回目の授業評価を実施した際の生徒の反応を踏まえ、質問内容を分かりやすい表現に変える等の手直しを加え実施した。

Ⅰ　研究の目的

これまでの学習指導の工夫・改善に関する研究は、教員側の授業評価を基になされることが多かった。授業は、教員と生徒で創るものである。特に、授業の受け手である生徒が授業をどのようにとらえ、どのように取り組んでいるかの情報は授業改善には欠かせない。これからは、授業創造の担い手である教員と生徒双方からの情報を生かして授業をより良いものに高めていくことが大切である。

平成１６年度から、すべての都立高校で「生徒による授業評価」が実施されている。しかし、授業評価結果を生かした授業改善の方法は、各学校で模索しているのが現状である。そこで、アンケート形式による生徒の授業評価を基に、教育の専門家である教員の知見を生かした授業改善の方法に関する実践的研究が求められている。本研究では、「生徒による授業評価」の分析・考察を通して、個に応じる指導を中心とした授業改善に関する実践的な研究を行う。このような、個に応じる指導の充実を通して、生徒の学習意欲を高め、学習内容を定着させると同時に、生徒のもつ自ら考え実践する力を伸ばしていくことができると考える。

Ⅱ　研究の方法

生徒にとって魅力のある授業を創造していくため、教員は、一層の生徒理解を深めると共に、生徒からの授業に対する評価を真しに受け止め、学習指導の工夫・改善を図っていくことが必要である。

本研究では、アンケート形式による「生徒による授業評価」を実施し、生徒の実態や授業に対する反応を把握した。アンケートの項目は、数学の学習指導に特化したものを用いた。次に、授業評価結果を分析し、研究協議し、個に応じる手だての中から、継続・強化するも

の、工夫・改善するものなどを分類・整理した。その成果を踏まえ、個に応じる具体的な手だてを工夫し、検証授業を通してその有効性の検証を行った。このように、授業評価から授業改善の検証までの過程を考察した。

Ⅲ　研究の内容

個に応じる指導の充実を目的とする授業改善のための授業評価項目を検討するため、予備調査としての授業評価を、委員それぞれが勤務する高校の生徒を対象に、学校ごとに評価項目を決め実施した。この評価結果を踏まえ、以下のように研究を進めていった。

1　基礎研究

生徒が授業に集中すること、授業に関心・意欲をもつこと、知識・技能を獲得していく過程にはどのようなことが関連しているのかを探ることに留意しながら、評価項目の検討を進めた。また、校内研修を実施する上での留意事項を考察した。

(1)　授業評価と授業改善

授業評価は、生徒からの評価そのものがねらいではなく、教員の資質・指導力の向上や授業改善を目的として行うものである。例えば、教材の難易度については、目指す授業像によって評価のとらえ方が異なる。より難易度の高い教材に対する理解力の養成を目的とする授業展開の場合、学習者の理解力より少し難しい教材を扱うことになる。もし、「授業の難易度はちょうど良いですか」という評価項目に対して「そう思う」という回答が多ければ、更に難易度の高い教材を扱わないと適正ではない。

また、授業評価は、指導が十分でない部分を改善することのみに利用されている訳ではない。授業者が気付いていない指導法に対して、生徒から良い評価を得ることがある。これは授業評価を実施してわかることであり、授業者にとっても大きな自信となる。

生徒が授業の内容への理解度を高める方法は、必ずしも授業中の指導だけによらない。授業終了後の生徒からの質問による指導、家庭学習指導、補習指導など授業時間外の指導も、授業の内容への理解を深めるための大切な指導となる。したがって、予習・復習の定着や宿題提出の習慣などは、円滑で充実した授業指導の実現に向けた非常に重要な要素となる。それゆえ、生徒自身の授業への取組に関する自己評価も、授業改善のための資料として重要な位置を占める。

(2)　数学科に特化した評価項目

数学科の指導では、指導内容の理解度を確認するため問題演習の時間を設けることが多い。この時間が生徒にとって適当であるかは、個に応じる指導を目指す授業では重要となる。また、様々な解法を示すことにより、学習内容に対する生徒の興味・関心が高まることが期待できる。

これを受けて、本研究では、「問題演習の機会はちょうど良いですか。」「別解を示されたことによって、興味・関心が高まりましたか。」という数学に特化した評価項目を設けた。

(3)　その他の評価項目

授業では、問題演習の時間を利用して、机間指導を実施し、生徒個々の理解度の差に応じる手だてを行うことが可能である。授業内容・方法に対する工夫は、教員の熱意として

生徒に伝わり、生徒の学習意欲を高める要素となる。授業のねらいを生徒に明確に示すことにより、授業の向かう方向が生徒にも伝わり、生徒の理解力の向上が期待できる。

そこで、評価項目として、「個別指導は適切になされていますか。」「授業内容・方法に工夫を感じますか。」「毎時間の授業のねらいが明確になっていると思いますか。」を設けた。

自己評価に関しては、「数学の予習をして、授業にのぞんでいますか。」「集中して授業に参加していますか。」「数学の授業の復習をしていますか。」の３項目とした。

また、項目の内容が生徒に分かりにくくならないように十分に留意した。

(4)　校内研修を進める上での留意点

校内研修を行うときに、学校全体の研修とグループ研修の二つの方法が考えられる。グループ研修には、教科別、共通課題別、学年別など教育課題に応じたグループ編制が考えられる。ここでは数学科における研修を取り上げる。

数学科として行うときには、数学教育の特性を考えた様々な問題提起や改善に向けての方策が期待できる。一人一人が参加意識をもって効率的に研修を行うためには、まとめ役の教員が研修の観点をいくつかあげ、事前に情報提供を呼びかけておくなどの工夫が必要である（例：復習に対する手だて、共通課題の取り上げ方、授業に集中させる方策等）。

校内研修を行う際の留意点を下にあげる。

①運営をスムーズに進めるため、集計結果から研修課題を２～３点に絞っておく。

②異なる視点からの改善策を期して、担当外の教員の意見を多く聞く。

③結果から各教員の授業を批評するのではなく、現時点での課題と方策を考える。

④評価項目の表現が適切であったか、検討する。

⑤新たな課題に応じた評価項目を検討する。

実際に授業参観することにより十分な協議が期待できる。生徒による授業評価の実施と併せて授業参観を実施した上で、校内研修で授業改善の方策を検討することが大切である。

(5)　授業改善の方法と時期

生徒による自己評価と授業評価の結果から授業における改善点を考える場合、以下のように短中期的な課題と長期的な課題が考えられる。

授業の技術（板書の方法、机間指導など）や授業中の演習の位置づけ、課題の量、難易度などに関する改善は、短中期的な解決に向けた手だてを考えることができる。これらは、校内研修を通して年度内の改善が期待できる。しかし、授業内だけでは多様な生徒への対応が難しいときなどには、次年度に向けて習熟度別指導や少人数指導を取り入れることが改善の手だてとなることもある。また、カリキュラムや年間授業計画の見直しが解決の糸口になる場合などは、年度内の解決が難しいので長期的に数学科や学校全体で話合いを継続することが必要となる。

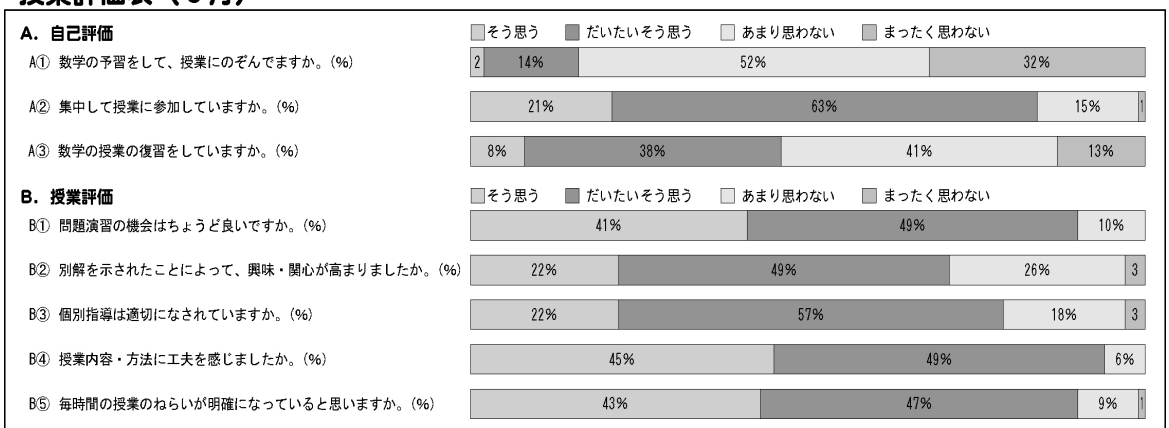
２　授業評価と校内研修

都立高校普通科第１学年４クラスにおいて、平成１６年４月から６月の数学の授業について６月末に生徒による授業評価を実施・集計した。結果を基に、委員による研究協議（以下「校内研修」という。）を行い、授業改善の具体的な手だてについて考察した。

(1)　授業評価とその集計

６月に実施した生徒による授業評価では、下の授業評価表（６月）に示すように、自己評価及び授業評価については４枝選択とした。また、授業評価Ｂ④とＢ⑤については、特に「なぜそう感じましたか。」との記述欄を設けた。Ｃ①では生徒自身の授業に対する振り返りを、Ｃ②では授業への要望を求めるため記述のみの項目とした。

授業評価表（６月）



記入欄

B④ 授業内容・方法に工夫を感じましたか。～なぜそう感じましたか。	C① あなた自身の授業の取り組みで、良かった点や反省すべき点。
プリントを使っている(8)　黒板のまとめ方がよい(3) 毎回グラフをかいて丁寧にやってくれる(3)　絵を使ったりしている(3)　丁寧にやってくれる(3)　演習の仕方がよい(2) ねらいを教えてくれる(2)　何が工夫かわからない(2)　ノートをとる時間をとってくれる(9)別解を示してくれる(5)　ペースがはやい(1)　問題を解くときのキーワードがはっきりしていてわかりやすい(1)　計算を簡単にする方法や裏技を教えてもらえる(1)	予習・復習がほとんどできていない(36)　集中できず、ぼーっとしてしまう(10) スピードがほどよい(1)
B⑤ 毎時間の授業のねらいが明確になっていると思いますか。～なぜそう感じましたか。	**C② 授業についての要望。**
ねらいを黒板に書いている（言っている）から(54)　ちゃんとテーマに沿って進めている(5) 説明が丁寧　演習をしているとわからなくなる　毎時間やることが進んでいき、前にやったことを使って解く問題があるから　区切りでしっかり終わるから　授業の最後にキーポイントを言ってくれる黄色い字で大事なところをかいてくれる　質問の意味がわからない　毎時間やることが進んでいき、前にやったことを使って解く問題があるから	教え方が丁寧(5)　字がきれいでみやすい(4)　授業全体がよいと思う(2)　もう少しゆっくりがいい(4)　すすむのがゆっくり(2)　このままでよい(2)　解く時間がほしい(3)　沢山問題を解くこと(2)　演習時間がちょうどよい(2)　問題演習をしてほしい　特製プリントがほしい　ノートがとりやすい(2)　個々に質問できる機会がほしい

(2)　校内研修

校内研修において、評価項目ごとの集計結果を基に検討し、次のような結論を得た。

Ａ①について、授業の予習をしていない生徒が大半であった。改善の手だてとして毎授業の終わりに「教科書の＊＊に目を通してくる。」「＊＊について考えてくる。」など、１０分程度でできる予習課題を与えることが提案された。

Ａ②について、集中していないと回答した生徒の状況について検討した。授業者より「今回、授業評価をとった時期が学校行事の直後であったため、普段は授業に集中できる生徒でも疲れていて授業に集中できなかったのではないか。」という情報が伝えられた。今回の結果からは集中度に関する状況が正確に把握できなかったと判断し、この集計結果を基に改善策を考えるのは見送ることにした。

Ａ③について、「数学復習チェックシート」をルーズリーフに印刷し、生徒に配布する手だてを考案した。教員が指定した問題や自主的に取り組んだ問題を、月日とともに記入し、「できれば○、できなかったら×」というように生徒が記入できるように工夫した（補助資料参照）。そして、生徒がこのシートを記入することで自主学習の管理ができ、また、励みになるといった効果を期待した。生徒はシートが足りなくなったら教員のところへ取りに行く。その際に個別に学習の方法について指導もでき、個に応じる指導にもつながると考えた。

Ｂ①について、問題演習の機会については評価が高く、今後も指導を継続していくことになった。

Ｂ②について、回答に困る生徒がみられたので、設問の表現が適切ではなかったと考え、後述のように問いかけ方を工夫改善することとした。

Ｂ③について、個別指導については評価が高く、今後も机間指導を通して継続して行うこととした。

Ｂ④について、生徒が記述した文章を一つ一つ分析・検討し、肯定的評価を得た内容に関しては継続・強化することにした。また、授業の進度や授業中の生徒の指名など、評価の分かれる事項については、今後、個に応じる指導を考える際の貴重な情報とした。

Ｂ⑤について、授業者から「ねらいを授業の始めに黒板に書き、授業の終わりまで消さないようにしている。」という報告があった。毎時間の授業のねらいが明確に生徒に伝わり、授業内容の理解につながると考え、毎時間のねらいを示す重要性を再認識した。

Ｃ①では、自分の取組の反省点として「予習・復習、特に復習をしておけばよかった。」などを挙げる生徒が 24％いた。予習・復習をしていない生徒の中に予習・復習の大切さに気付き始めている生徒も多く存在することが分かる。このほか、Ｃ①やＣ②の記述欄を考察し、校内研修において以下のような授業改善の手だてや課題について共通認識をもった。

＜継続・強化していく点＞

問題演習の機会の与え方、別解を示すことで数学に興味をもたせること、机間指導を中心とした個別指導、毎時間の授業のねらいを明確に示すこと、授業の工夫（プリントを使用、板書の工夫、グラフや図を用いた説明、ノートをとる時間を確保など）

＜改善・工夫する点＞

復習の習慣づけ（数学復習チェックシート）

＜継続審議とした点＞

予習の習慣づけ、授業評価の実施時期と間隔、授業の集中度と予習・復習との関係

３　検証授業

(1)　単元名　　図形と計量

(2)　本時の指導における手だて

・本時のねらいの明確化：授業の始めに生徒にとって分りやすい言葉で説明し、黒板に書き、授業の最後まで残す。

・板書の工夫：色チョークやマークなどを効果的に使用する。

・図やグラフを用いた考察：略図をかいて考察することの有用性を強調する。

・ノートにまとめる時間を確保：集中して説明を聞く時間を確保する。

・個別指導の多用：机間指導の時間を多くとることで、個別指導の時間を確保する。

・教材の工夫：生徒が測量したデータを用いたり、生徒の考えを取り入れたりすることで学習内容への興味・関心を高める。

・復習の習慣づけ：復習用の問題を随時指示し、黒板に書き、復習シートに記入させることで、復習への取組を高める。

(3)　指導計画

第１項　鋭角の三角比　　５時間　……本時　第２時間目／５時間

第２項　鈍角の三角比　　６時間

第３項　正弦定理と余弦定理　　５時間

第４項　図形の計量・演習　　10 時間

(4)　本時の内容

三角比の値を用いて、図形の辺の長さ・身近な事象の考察（高さの測量）を行う。

(5)　本時の目標

・三角比を用いて、直角三角形の辺の長さを求めることができる。(表現・処理)

・測量について関心をもち、高さを求めようとする。(関心・意欲・態度)

・三角比を用いて、高さを求めることができる。(表現・処理)

・略図をかいて式を立てる。(数学的な見方や考え方)

関心・意欲・態度	測量に関心をもち、高さを求めようとする。
数学的な見方・考え方	タワーの高さを求めるために、略図をかいて式を立てることができる。
表現・処理	三角比を用いて、直角三角形の辺の長さを求めることができる。
	三角比を用いて、タワーの高さを求めることができる。

学　習　内　容	指導過程・学習活動	評　価　・　留　意　点
【導入】 1 本時のねらいを提示	○本時のねらい『三角比の値を利用して、長さを計算で求める』を説明し、板書する。	・「本時のねらい」を板書し、授業の最後まで残す。 ・本時の学習内容について、簡単な質問を行う。
2 正弦・余弦・正接の定義（前時間）の復習	○相似な直角三角形の辺の比は同一であること、そして正弦・余弦・正接の定義を確認する。	・ノートをとる時間を確保し、説明に集中させる。
【展開】 1 直角三角形の角と1辺を与えて、辺の長さを求める。	○三角比の表を用いて、直角三角形の辺の長さを求めてみよう。 ⇒別紙プリント”三角比と辺の長さ Vol.1” ●S-1 式を立てて、三角比の表を使い解答できる。 S-2 式を立てることができる。 S-3 どう解決してよいか分からない。	・机間指導 T-1 問題演習をさせる。 T-2 反復練習で解答できるように定着させる。 T-3 三角比の定義から式が立てられないかを問う。 ◎三角比を用いて、辺の長さを求めることができる。(表現・処理)〈ノート〉
2 具体的に、身近な事象を考察する。	○校舎の高さを求めてみよう。 ⇒例題　別紙プリント”三角比と辺の長さ Vol.2” ○具体例から、略図をかいて高さを計算して求める。 ※データは、生徒が事前に測量したものを用いる。	・３通りの測量を示し、２通りの式を立てて解説する。 ・図をかいて考えることの重要さを強調する。 ・決して良い精度の値は得られないことを確認する。

3 具体的に、身近な事象を考察する。	○タワーの高さを求めてみよう。 ○どのようにして高さを求めたらよいか？ ○生徒の考え方を要約し・説明する。それぞれの考え方について検討する。 S-1 タワーから一定の距離をおいた 2 地点から、タワーを見上げた角度を測る。 S-2 タワーから一定の距離をおいた 1 地点から、タワーを見上げた角度を測る。 S-3 タワーのパンフレットやホームページなどで調べる。 S-4 タワーの頂上からロープを張る。 →実際にロープを張ることはできない。 S-5　直接測定することはできない。 ○略図をかき、S-1 の考え方へのヒントを与える。 ●実際に測量したデータをもとに、三角比の値からタワーの高さを求める。 ⇒別紙プリント ●S-1 略図をかいて、式を立てて解答できる。 S-2 式を立てることができない。 ●具体的な長さ・高さなどの計量を、三角比を用いて計算で求めることができることを認識する。 ○解説：略図をかき、式をたて、高さを求める。	・生徒同士で考えさせる。 ・机間指導 ◎測量について関心をもち、高さを求めようとする。(関心･意欲)〈生徒の表情〉 ・良い考え方があったら取り上げる。 T-1 計算して、高さを求めさせる。 T-2 誤差を考慮し、他に方法がないか考えさせる。 T-3 三角比を活用して計算で高さを求められないか､考えさせる。 S-4 直角三角形の斜辺以外の辺に着目させて考察させる。 S-5 三角比の活用を考えさせる。 ・生徒同士で考えさせる。 ・机間指導 ◎三角比を用いて、高さを求めることができる。(表現･処理)〈発言内容･ノート〉 T-1 問題演習をさせる。 T-2 略図の中の直角三角形に注目させ、考えてみることを指示する。 ◎略図をかいて式をたてることができる。 (数学的な見方や考え方)〈机間指導･ノート〉 ・説明に集中させる。 ノートをまとめる時間を確保する。 ・図をかいて考えることの重要さを強調する。 ・黒板に復習問題を提示する。 復習シートに記入させる。
【まとめ】 1 本時のまとめ 2 次回の予告	○測量の具体例を挙げる。 ○復習の指示 ○『特別な角の三角形の比の値』についての予告をする。	

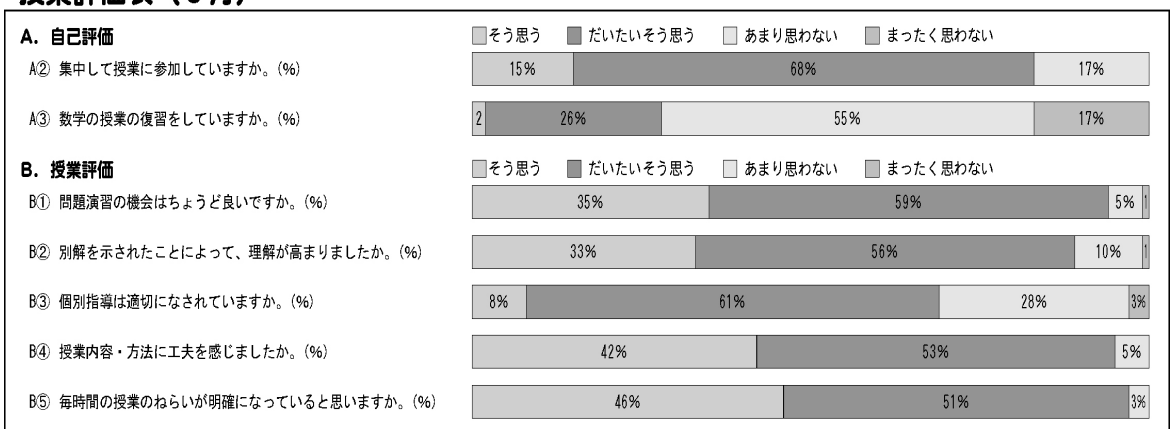
4　検証授業後の授業評価の結果と考察

９月末に実施した検証授業後に、２回目の授業評価を行った。評価結果を基に校内研修を行い、１回目の評価結果を生かした授業改善の成果と課題について考察した。

(1)　実施結果とその分析

校内研修の結果、６月に行った授業評価項目からＡ①を削除し、Ｂ②の表現を変更して９月からの授業について授業評価を実施した。

授業評価表（9月）



記入欄

B④ 授業内容・方法に工夫を感じましたか。～なぜそう感じましたか。	C① あなた自身の授業の取り組みで、良かった点や反省すべき点。
別解を示してくれる(26)　プリントを使っている(18)　黒板のまとめ方がよい(16)　わかりやすい(11)　丁寧にやってくれる(8)　かんたんな問題からはじまって、だんだんとむずかしい問題ができるようになっている(8)　ノートをとる時間をとってくれる(6)　紙で図形をつくったりしてるところ(6)　答えを問く前にヒントを与える点(2)　きちんとまとめられているとこ(2)　タワーの問題(2)　測量(2)　復習プリント(1)	復習ができている(5)　予習・復習がほとんどできていない(29)　集中できず、ぼーっとしてしまう(25)
B⑤ 毎時間の授業のねらいが明確になっていると思いますか。～なぜそう感じましたか。	**C② 授業についての要望。**
ねらいを黒板に書いている（言っている）から(78)　ちゃんとテーマに沿って進めている(3)　毎回、初めに目標を立ててから授業をしている所(2)　時間通りに終わるから(1)　問題を一問一問やっているから(2)　大学で使える公式が出てくる(1)　なみせんとかを使ってくれるからねらいのぶぶんがわかります(1)　一分野の様々なことを集中して毎時間教えてくれるため(1)　問題ごとの色々な解き方がけっこう良くわかるから(1)	分かりやすい(44)　授業のスピードがちょうど良い(9)　字がきれいでみやすい(8)　ノートがとりやすい(6)　プリントで１ランク上の問題ができるのでよい(3)　ノートとる時間をもう少し長くとってほしい(3)　もっと演習をふやしてほしい(3)　計算途中をあまり少略してほしくないです。やり方が分からなくなるときがあるので。(1)　わからないところを聞くとすぐに答えてくれて、その場で納得できる(1)

Ａ②については、83%の生徒が「そう思う」「だいたいそう思う」と答えており、肯定的な評価が得られた。Ａ③では、72%の生徒が「あまり思わない」「まったく思わない」と答えている。復習については、９月から「数学復習チェックシート」を利用するなど改善を図ってきたが、現時点では効果は見られていない。Ｃ①の記入欄に注目すると、29 名の生徒が「予習・復習がほとんどできていない」と記述しており、生徒側からも依然として予習・復習に対する効果的な手だてを課題としていることが見てとれる。

Ｂの授業評価について、Ｂ①～Ｂ⑤までの全項目で、「そう思う」「だいたいそう思う」と答えた生徒がほぼ 70%以上と肯定的な評価が継続して得られている。

Ｂ④の記入欄では「別解を示してくれる。」と記述した生徒が 26 名おり、別解を示すことによって、授業への興味・関心が高まっていることがわかる。「プリントを使っている。」と 18 名の生徒が記述しており、プリントの使用が有効であったと考えられる。「簡単な問題から始まって、だんだんと難しい問題ができるようになっている。」と８名の生徒が記述していることなどから、問題の選択が生徒にとって適切であったことが分かる。また、「丁寧である。」、「分かりやすい。」、「まとめ方が良い。」と 45 名の生徒が記述している。

Ｂ⑤の記入欄では「ねらいを黒板に書いている（言っている）から。」と 78 名と半数以

上の生徒が記述しており、前回同様に高い評価が得られた。

Ｃ①の記入欄では、「集中できず、ぼーっとしてしまう。」と記述した生徒が前回の 10 名より 25 名と多くなっているが、評価時期（文化祭直後）などの要因を含めて、より詳しい検討が必要である。

Ｃ②の記入欄では、「分かりやすい。」と 44 名の生徒が記述している。この結果から、授業については良い評価が得られている。少数の意見ではあったが、「もっと演習を増やしてほしい」(3 名)など、授業改善のために参考となる意見もみられた。

(2)　授業評価結果（６月）を生かした授業改善の成果

Ａ③以外の項目については、「そう思う」「だいたいそう思う」で約 70％以上の評価を得たことにより、６月同様に９月の授業評価においても肯定的な評価を得ることができ、「肯定的な評価を得た手だてに関しては継続や強化をする」ことが達成できた。

特に、質問項目の表現を変更した「別解を示されたことによって、理解（興味・関心）が高まりましたか。」については、前回に比べて大幅に評価が上昇している。検証授業においても、「タワーの高さの測り方」の問いかけに対して様々な考え方が生徒から示され、興味・関心が高まる内容であった。

(3)　検証授業を踏まえた更なる授業改善に向けて

校内研修による改善として、復習の習慣を定着させるために、「数学復習チェックシート」を利用したが、今回の評価では、肯定的な評価を得ることはできなかった。もう少し長い目で評価をしていく。今後も「数学復習チェックシート」が効果的に利用できるように指導の改善を図っていく。

９月の授業評価では、予習の項目を削除したが、予習→授業→復習のサイクルを習慣づけるためには、今後は予習の手だても校内研修において検討していく。

授業評価には、これまでの授業に対して行われる現状の評価（Ａ自己評価、Ｂ授業評価やＣ①）と改善策を探る評価（Ｃ②）がある。今後は、これらの違いを鮮明にした評価項目による授業評価を実施し、更なる授業改善を図っていく必要がある。

Ⅳ　成果と課題

「生徒による授業評価」を実施し、校内研修を通して評価結果の分析・考察を行い、個に応じる指導を中心とした授業改善を図る実践的な研究を進めてきた。この研究を通して、次のような成果や今後の課題を得ることができた。

１　成果について

実際に2回の授業評価と検証授業、それらに伴う校内研修を行った結果、授業評価を行うことにより教員が意識していなかった授業のよさを生徒から気付かせられることもあった。また、授業評価や校内研修を通して生徒や教員がどのような授業を望んでいるかを知ることにより、個に応じる指導がより一層可能になることが実感できた。

検証授業実施校については、Ⅲの４で述べたような成果を得ることができた。しかし、指導する教員や学習する生徒によって授業改善の手だては異なる。ここでは、授業評価項目の設定から授業改善までの流れとそれぞれの留意点を成果として述べる。

評価項目設定

①教科に特化した内容を盛り込む。
例「授業内容・方法に工夫を感じましたか。なぜ、そう感じましたか。」
②個に応じる具体的な手だてを考えるには、自由記入欄の記述が非常に参考になる。
例「問題演習の機会が適切か。」「別解を示すことにより興味・関心が高まったか。」

授業参観、授業評価アンケートの実施

校内研修

＜運営＞
①運営をスムーズに進めるため、集計結果よりあらかじめ研修課題を２～３点に絞っておく。
②異なる視点からの改善策を期して、担当外の教員の意見を多く聞く。
③結果から各教員の授業を批評するのではなく、現時点での課題と方策を考える。
④評価項目の表現が適切であったか、検討する。
⑤新たな課題に応じた評価項目を検討する。

＜目指す授業像を基準にした授業改善の視点＞
①評価が高かった内容は、継続・強化
例「ねらいを授業の始めに黒板に書き、授業の終わりまで消さないようにする。」
②評価が低かった内容は、工夫・改善する。（具体的な改善策を考え、改善する。）
例「数学復習チェックシートの利用」

授業改善・実践

授業参観、授業評価アンケートの実施

校内研修

再度、授業評価を実施して、手だての有効性の確認や新たな課題の解決に向けた改善を図りながら、今後の授業の改善を図っていく。

２　今後の課題について

・ 授業評価結果の信頼度を高めるためには、学校行事など生徒の活動を考慮にして調査時期を設定する必要がある。どのような時期に授業評価を実施すればよいのかについて、生徒の活動も考慮に入れた研究が必要である。
・ 現状を評価する評価項目と改善策を探る評価項目を、適当に配置した授業評価についての研究が必要である。
・ 今年度は授業評価から授業改善への立ち上げともいえる研究をしてきたが、授業評価から授業改善への一連のサイクルを繰り返すことにより、授業における課題がどのように変化し、それに対してどのような方策を考えていくことがよいかについて、長期的に研究する必要がある。

参考文献

「生徒による授業評価を生かした授業改善を目指して」 東京都教育委員会　平成16年1月